

知っておきたい 加味帰脾湯の基本と臨床のポイント

加島 雅之 先生 熊本赤十字病院 総合内科 部長

出典 内科摘要

加味帰脾湯の出典は、『内科摘要』(薛己・16世紀)である。

効能又は効果

虚弱体質で血色の悪い人の次の諸症：貧血、不眠症、精神不安、神経症

古典に見る加味帰脾湯

内科摘要

加味帰脾湯は帰脾湯に柴胡と山梔子を加味した処方である。内科摘要では帰脾湯は「考えすぎで脾が傷つき、血をコントロールすることができず、出血しやすくなった状態。あるいは忘れやすさや、常にある動悸や、突然出現する動悸、寝汗が出る場合。あるいは心脾に痛みが生じ、臥床しがちで食事が少なくなり、大便に問題がある場合。あるいは四肢や体が重く痛み、月経のトラブルがあり、赤や白色の帯下がある。あるいは考えすぎで脾を障害し、周期的な発熱と下痢を来す場合」を治療すると記されている。

牛山方考(香月牛山・1699年)

帰脾湯および加味帰脾湯の適応について『牛山方考』では以下のように記されている。

- 考えすぎで心・脾が消耗し、物忘れや動悸を治療する素晴らしい方剤である。
- 未亡人や未婚の女性などが男性を思って得られず、種々の鬱証を生じて、解鬱の方剤を用いても無効で虚弱している場合に著効することがある。
- 心脾の血虚して陰火(相火)が暴発し、これによって発熱し頭部に発疹が出現し、女性は月経不順、男性は排尿障害を呈する場合は山梔子・柴胡を加えて著効する場合がある。牡丹皮を加えるとより効果的である。
- 様々な疾病で間違った薬の投与で脾胃が障害される場合で、六君子湯や補中益気湯が無効の場合は脾の血が治まっていない。本方剤を用いて著効する場合がある。

加味帰脾湯の方剤解説

気血双補剤の代表処方

加味帰脾湯(帰脾湯)は気血双補剤の代表的な処方の一つである。

気虚の症状は、生理機能の低下、倦怠感・息切れ、声に力がない、活力の低下、冷えなどである。血虚は、気の働きが円滑にできないことと、栄養状態が悪いことを意味する。前者の症状は、筋肉のこわばり、眼の疲れ、神経の過敏など、後者の症状は爪が割れやすい、皮膚・毛髪の潤いが少ない、月経量の低下、動けるが休むと疲れて動けないなどである。

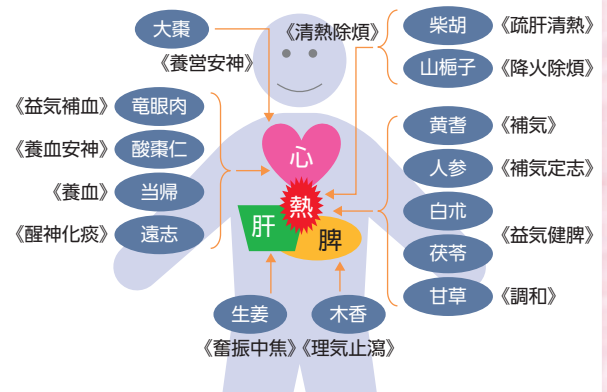
また、帰脾湯はその名が示すとおり、『脾』に対する働きを有する処方である。脾の生理作用には、「運化を主る」「昇清を主る」「統血を主る」が考えられている。

「運化を主る」は消化吸収代謝と同化を支配する作用であり、津液の吸収・輸布の作用に強く影響している。「昇清を主る」は気を上向きに持ち上げる作用、「統血を主る」は脈外への血の漏出を防ぐ作用と考えられている。

加味帰脾湯の適応となる病態は、心血虚、脾気虚、肝鬱化熱である(図1)。

図1 加味帰脾湯の方剤解説

- 【病態】
- 心血虚：病的不安、熟眠障害、動悸
 - 脾気虚：倦怠感、食欲不振、下痢
 - 肝鬱化熱：イライラ、焦燥、胸苦しさ



現代医学的な検討の報告

Tamadaらは、前立腺癌や転移性腎細胞癌でホルモン療法や抗腫瘍療法を受けている患者35例に加味帰脾湯を投与したところ、短期間で疲労感は有意に改善し、自律神経は安定したと報告している¹⁾。

野上らは小児不応性血球減少症の8歳女児に加味帰脾湯エキスと芍帰膠艾湯エキスを投与したところ、予定されていた骨髄移植が中止された症例を報告している²⁾。

加味帰脾湯の精神に対する作用

漢方における精神の考え方

『思』の漢字は、「田」の部分は小児の頭蓋骨を上から眺めた泉門の象形、「心」は心臓であり、頭部と心臓が一緒に働くことが人間の思惟活動そのものであることを表している。

漢方では『神』は高度な統合・調節を行う気の特徴形態を指しており、人間の精神活動の主体と考えられている。神の源は「心」に宿るとされているが、他の五臓にも活動の分担があると考えられている(五神論)。

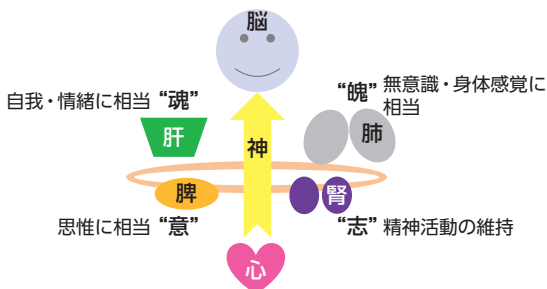
すなわち、心から投影される神の統合活動が五臓の働きによって脳に投影されることで正常な精神活動が営まれていると考えられている(図2)。

精神症状の鑑別

加味帰脾湯は「心」と「肝・胆」に対する働きが強くみられる。「心」の精神症状としては了解不能な内容、意識や思考の異常、動悸を伴いやすいという特徴があり、「肝・胆」の精神症状は了解可能・反応性、情緒の障害、季肋部の違和感があるという特徴があると考えられている。

図2 漢方における精神の考え方

- 【神】
- 高度な統合・調節を行う気の特徴形態。
 - 精神活動を行う主体。
 - 五神論
- 心: 『神』 意識清明さ、統括の「はたらき」
肺: 『魄』 身体感覚・無意識の「はたらき」
脾: 『意』 思惟する「はたらき」
肝: 『魂』 自我、情緒の「はたらき」
腎: 『志』 ある方向に継続する「はたらき」



漢方では不安は「胆」と「心」の異常であると考えられている。「胆」の不安は驚きやすさ、焦燥感が強い、ため息が多い、決断力が低下するなどであり、「心」の不安は予期不安や全般性不安障害、PTSDのように思考内容の異常を伴うものと考えられている。

「心」の問題における不安に対する加味帰脾湯の効果

● 臨床試験成績

Kobayashiらは、難治性慢性便秘症と不安を抱える女性患者24例の不安感や抑うつ症状が加味帰脾湯の投与後速やかに改善したと報告している³⁾。また、Leeらは担痛患者の睡眠の質が加味帰脾湯投与2週間で有意に改善したと報告している⁴⁾。

● 症例1 42歳 女性

日常生活に支障をきたす不安感が強く、中途覚醒があり、疲れると不安感が増強し、不安になると動悸と焦燥感、胸が暑苦しく感じる。何気ないことでも何かをしようとすると急に不安になることがある。過食で胃もたれしやすく、ストレスがかかると腹痛・下痢になりやすい。不安が強い時はイライラもしやすい、などの症状があった。

漢方医学的所見から心血虚・肝鬱化熱・肝脾不和と弁証し、加味帰脾湯を処方したところ、約2週間の服用で不安感は減少した(図3)。

● 症例2 68歳 女性

以前より不安感が強く、精神的ストレスが加わると気分の落ち込みとともにイライラ、顔のほてり感、動悸なども生じ、SSRIなどの治療では症状は改善しない。不安は誘因がなくても生じ、何かをしようとすると不安感にかられる。

図3 症例1 42歳 女性

【現病歴】 以前より不安感が強い。健診で肝腫瘍を指摘され、精査のためにMRIを施行しようすると不安と動悸感で検査ができず。不安が抑えられず日常生活も支障をきたすため受診した。

【現 症】 出かけようすると戸締りや火の始末が気になり、何度も見直してしまう。中途覚醒あり。疲れると不安が強くなる。不安になると動悸と焦燥感、胸が暑苦しく感じる。特に何気ないことでも何かをしようとすると急に不安になることがある。過食で胃もたれしやすく、ストレスがかかると腹痛・下痢になりやすい。不安が強い時はイライラもしやすい。

脈診: 全体に脈細、左寸脈、軽按滑、按沈無力、左関脈軽度弦脈、右関脈無力

舌診: 舌胖大、淡紅、薄白苔

腹診: 腹力2/5、左胸脇苦満あり

【弁 証】 心血虚、肝鬱化熱、肝脾不和

【処 方】 加味帰脾湯

服用開始後約2週間で不安感が減少し始め、MRIを施行できた。

知っておきたい加味帰脾湯の基本と臨床のポイント

症状は疲れると増悪しやすい。胃もたれ感があるとともに下痢しやすい、中途覚醒や悪夢が多く熟眠感がないなどの症状があった。

加味帰脾湯の服用によって症状の改善は得られたが、動悸は時々あり、ほてり感を伴う。桂枝加竜骨牡蛎湯を併用したところ、動悸はほぼ消失し精神的動揺をきたすことも減少した(図4)。

全般性不安障害で胃腸障害が背景にあるとSSRIを服用できないことがあるが、加味帰脾湯は胃腸障害の改善が期待できる。また、加味帰脾湯でも不安感や動悸感が消失しない場合は桂枝加竜骨牡蛎湯の併用も検討するとよい。

図4 症例2 68歳 女性

- 【現病歴】** 以前より不安感が強かったが、約3年前から不安感が増悪。不安が強かったり、精神的ストレスが加わると、気分の落ち込みとともにイライラ、顔のほてり感、動悸なども生じる。SSRIの処方を受けるが、吐き気などで中断。ベンゾジアゼピン系の使用では眠気とふらつきが生じる。体重減少もあり紹介受診。
- 【現 症】** 不安は漠然として、特に誘因がなくても生じる。何かをしようすると、不安感にかられる。症状は疲れると増悪しやすい。胃もたれ感があるとともに下痢しやすい。中途覚醒や悪夢が多く、熟眠感がない。
脈診：全体に脈細、左寸脈、軽按滑、按沈無力、左関脈軽度弦脈、右関脈無力
舌診：舌胖大
- 【治 療】** 加味帰脾湯
イライラ、不安は改善。中途覚醒が減り、熟眠感が出るようになった。
動悸は時々ある。動悸があるときにはほてり感もある。
加味帰脾湯+桂枝加竜骨牡蛎湯
動悸もほぼ消失した。
精神的動揺をきたすことが減り、外出できるようになり、旅行にも行けるようになった。

加味帰脾湯の類縁処方との鑑別(図5)

● 抑肝散加陳皮半夏

抑肝散加陳皮半夏は、肝の気滯を背景に起こった内風に用いる処方である。肝の気滯があるため、イライラや抑うつ情緒の障害がある。溜まった気が急に動き始め、突発的な情動発作となって現れる。

抑肝散加陳皮半夏は抑肝散よりも気鬱に有効であり、陽性のイライラや怒りなどの情動発作だけではなく抑うつも絡むような精神症状に使いやすい。

● 加味逍遙散

加味逍遙散は肝の気滯と血虚を背景に、気が熱化したものを発散する処方である。前出の抑肝散加陳皮半夏とは異なり、怒りやすい、興奮しやすい、顔が真っ赤になるなどの熱の症状に用いる。

加味帰脾湯も近似したスペクトラムを有するが、加味帰脾湯は脾の気虚の症状があることと、心の血虚が中核にあるため病的不安感・予期不安感・熟眠障害・精神的な虚弱性などが中核にある。一方で加味逍遙散は肝の異常が中心となるため、情動の異常・精神的な興奮のしやすさが中核にある。

● 柴胡加竜骨牡蛎湯

柴胡加竜骨牡蛎湯は、肝の気滯が熱化したものが心に影響している状態、すなわちイライラや抑うつから生じた興奮性、陽性の情動反応と、心に熱が及ぶことによって過覚醒が生じるために不安や情動の不安定さが生じているよ

図5 類縁処方との鑑別

抑肝散加陳皮半夏



肝の気滯
イライラ、抑うつ。
内風
突発的な情動発作。
● 抑肝散は、肝の気滯を背景に起こった内風(気の過剰運動)に使用される。
● つまり、我慢、イライラによっておこる突発的な情動発作。
● 歯ざしり、レム睡眠障害。
● 特に気鬱(気の抑うつ傾向の強い気滯)に有効。

加味逍遙散



肝の気滯
イライラ、抑うつ。
肝の血虚
肌・髪の色つや低下、月経量低下、眼の疲れ、筋痙攣。
気の熱化
易怒、興奮などの陽性症状。
● 肝の気滯と血虚を背景に気が熱化したものを発散させる。
● つまり、イライラと潤いの低下を背景に興奮や陽性の精神症状になっているものを発散させて除く。

柴胡加竜骨牡蛎湯



● 肝の気滯が熱化したものが、心に影響している状態。
● つまり、イライラや抑うつから生じた興奮性、陽性の情動反応と、不安や情緒の不安定性が生じている。

桂枝加竜骨牡蛎湯



心神不寧
精神・意識の不安定な状況。
● 心の神の不安定さを改善する。
● つまり、驚きやすい、不安になりやすい、動悸を起こしやすいなどを改善する。

人参養榮湯



脾気虚
考えがまとまらない、疲れやすい、瘦せる。
肺気虚
息切れ、慢性咳嗽、身体表現性障害。
心血虚
病的不安(予期不安)、熟眠障害。
● 肺・脾の気虚を背景として、心の血虚もきたしている。
● つまり、慢性的息切れ、体重減少、サルコペニアに加えて不眠、意欲の減退、病的不安感。

うなときに用いる。

柴胡加竜骨牡蛎湯の医療用漢方製剤には大黄が配合されている製品があり、イライラや焦燥感など熱の症状を取り除く作用が強いと考えられる。

● 桂枝加竜骨牡蛎湯

桂枝加竜骨牡蛎湯は、精神の中樞の不安定さを伴う病態、すなわち些細なことで驚きやすい、不安になりやすい、動悸を起こしやすい、などの症状に用いる。

加味帰脾湯は心血虚で虚弱性のために不安になりやすいものに用いるが、桂枝加竜骨牡蛎湯は動揺性が増しているような状態を落ち着かせる目的で用いるという違いがある。

● 人参養栄湯

人参養栄湯は加味帰脾湯と同様に脾気虚と心血虚が背景にあるが、同時に肺気虚がある場合に用いる。すなわち肺・脾の気虚、心の血虚をきたしている状態で、慢性の息切れ、体重減少、サルコペニアに加えて不眠、意欲の減退、病的不安感などの精神的なフレイルにも用いることができる。

加味帰脾湯のその他の応用

耳管開放症

加味帰脾湯は耳管開放症に有効であることが報告されている^{5,6)}。耳管開放症は現代医学では有効な治療法がないが、本報告を契機に現在では加味帰脾湯が耳管開放症の汎用処方となっている。

耳管開放症の患者は、急激な体重減少や精神的に過敏な方が多いことから、漢方医学的に加味帰脾湯のよい適応であると考えられる。

鼻出血(図6)

症例は19歳男性、主訴は鼻出血である。13歳時にSLEと診断され、ステロイド剤と漢方薬(柴胡桂枝湯、補中益気湯など)の併用が行われているが、血小板が8万/mm³以下になると鼻出血がひどく、10万/mm³程度でも鼻出血をきたすことがある。ステロイドを内服すると、夜に眠れない・胃もたれ・食欲不振が増悪し、特に増量すると症状が顕著になる。

漢方医学的所見から、脾不統血・肝鬱化熱と弁証し、加味帰脾湯を用いたところ、3週間の服用で血小板数は8万/mm³から12万/mm³に増加し、経過中は鼻出血が1回のみでフォローできた。

図6 症例3 19歳男性

【現病歴】 13歳時にSLE(鼻出血、血小板減少)と診断され、ステロイド剤と漢方薬(柴胡桂枝湯、補中益気湯など)の併用が行われている。ステロイド剤を内服すると不眠、胃もたれ・食欲不振が増悪(増量で症状が顕著)する。ステロイドの減量希望で紹介受診した。

【現 症】 身長175cm、体重52kg。軽度の蝶形紅斑あり。指尖部を含む手掌紅斑あり。鼻出血は体が温まった場合や疲れたりストレスがたまったとき、特に夜間に起こる。イライラしやすく、気分の浮き沈みが激しい。気分がふさぎ込みやすく、不安感が強い。なかなか眠れず、中途覚醒も多い。食欲にむらがあり、油ものを食べると胃もたれする。腹部が急に痛くなることも多い。下痢しやすい。疲れやすく、冷え症で足が冷たくなりやすい。

舌診: 胖大、舌尖部が赤い。

脈診: 左寸脈無力、右関脈無力。

腹診: 腹力やや低下、腹直筋の軽度の緊張あり。

【弁 証】 脾不統血、肝鬱化熱

【処 方】 加味帰脾湯

加味帰脾湯の3週間の服用で、血小板は8万/mm³から12万/mm³に増加。

経過中に鼻出血は1回のみ。

加味帰脾湯の要点(図7)

加味帰脾湯は、心血虚(全般性不安・予期不安、熟眠障害)、気虚(消耗・虚弱性、倦怠感)、脾気虚(下痢・食欲不振)、肝鬱化熱(焦燥感、イライラ)を満たしている場合に用いる処方である。特に重要な点は、心血虚の不安などの症状と消耗の症状が中核にある。

他の処方との鑑別点として、人参養栄湯は老年症候群の合併(心肺腎の気血両虚)、柴胡加竜骨牡蛎湯はイライラ・焦燥・過覚醒(肝火凌心)、抑肝散加陳皮半夏は情動失禁・イライラ(肝風内動)、桂枝加竜骨牡蛎湯は動揺性が強く動悸も強い(心腎不交)時に用いる。

図7 加味帰脾湯の要点

- 全般性不安・予期不安、熟眠障害
- 消耗・虚弱性、倦怠感
- 下痢・食欲不振
- 焦燥感、イライラ

≪他の処方との鑑別点≫

- 老年症候群の合併(心肺腎の気血両虚): 人参養栄湯
- イライラ・焦燥・過覚醒(肝火凌心): 柴胡加竜骨牡蛎湯
- 情動失禁・イライラ(肝風内動): 抑肝散加陳皮半夏
- 動揺性が強く、動悸も強い(心腎不交): 桂枝加竜骨牡蛎湯

参考文献

- 1) Tamada S, et al.: Prostate Int 6: 55-60, 2018
- 2) 野上達也 ほか: 日東医誌 69: 178-183, 2018
- 3) Kobayashi A, et al.: Complement Ther Clin Pract 46: 101526, 2022
- 4) Lee JY, et al.: Integr Cancer Ther 17: 524-530, 2018
- 5) 石川 滋: 耳鼻臨床 87: 1337-1347, 1994
- 6) 石川 滋: phil漢方 70: 22-23, 2018